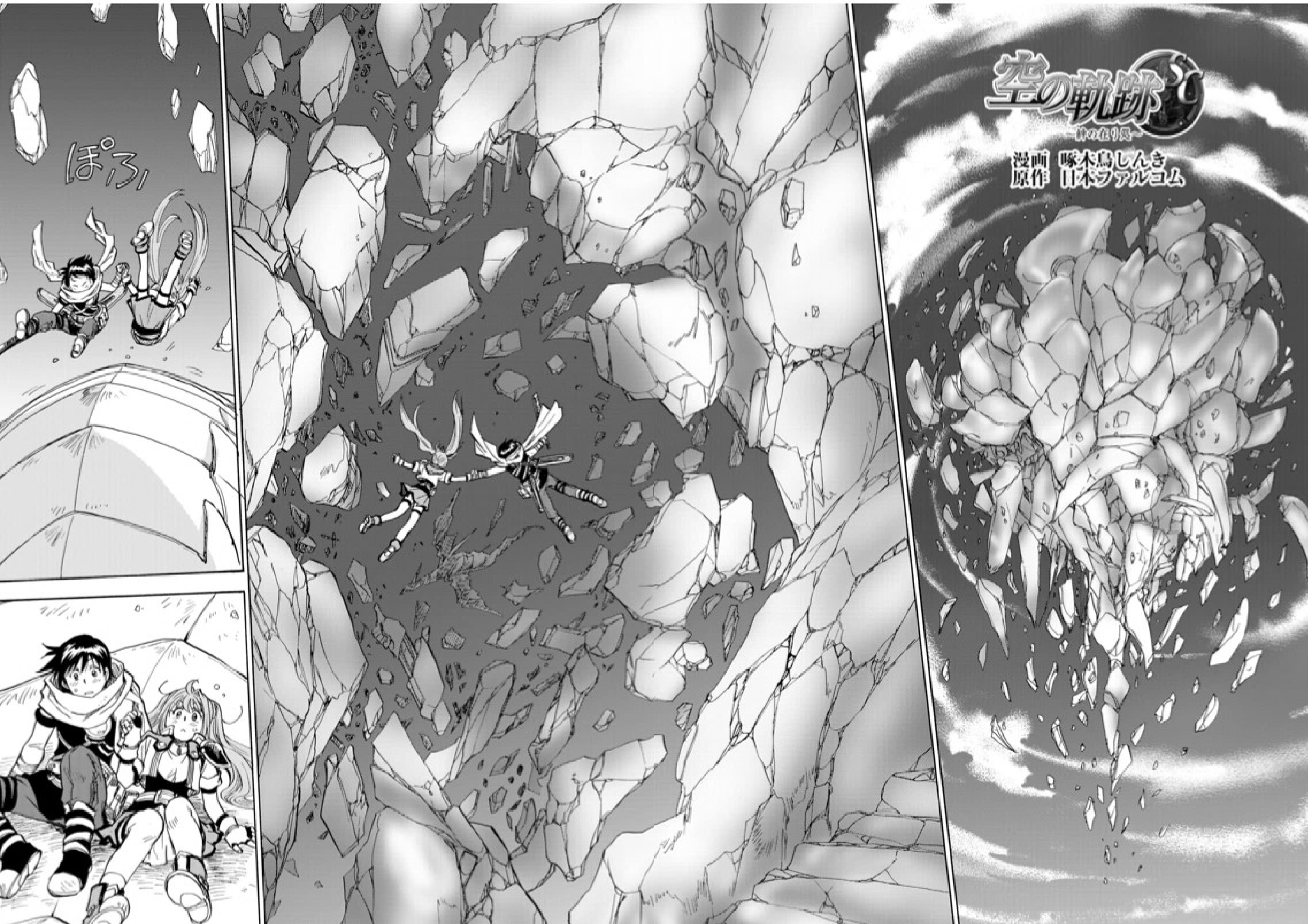

FALCOM MAGAZINE
Vol.150
エステルとヨシュアの軌跡がついに完結！
英雄伝説 空の軌跡SC
-絆の在り処-
ミレイユが大人の魅力たっぷりな新衣装を披露！
『英雄伝説 暁の軌跡』
ファルコムニュース
《サンドラス号》の機能拡張や



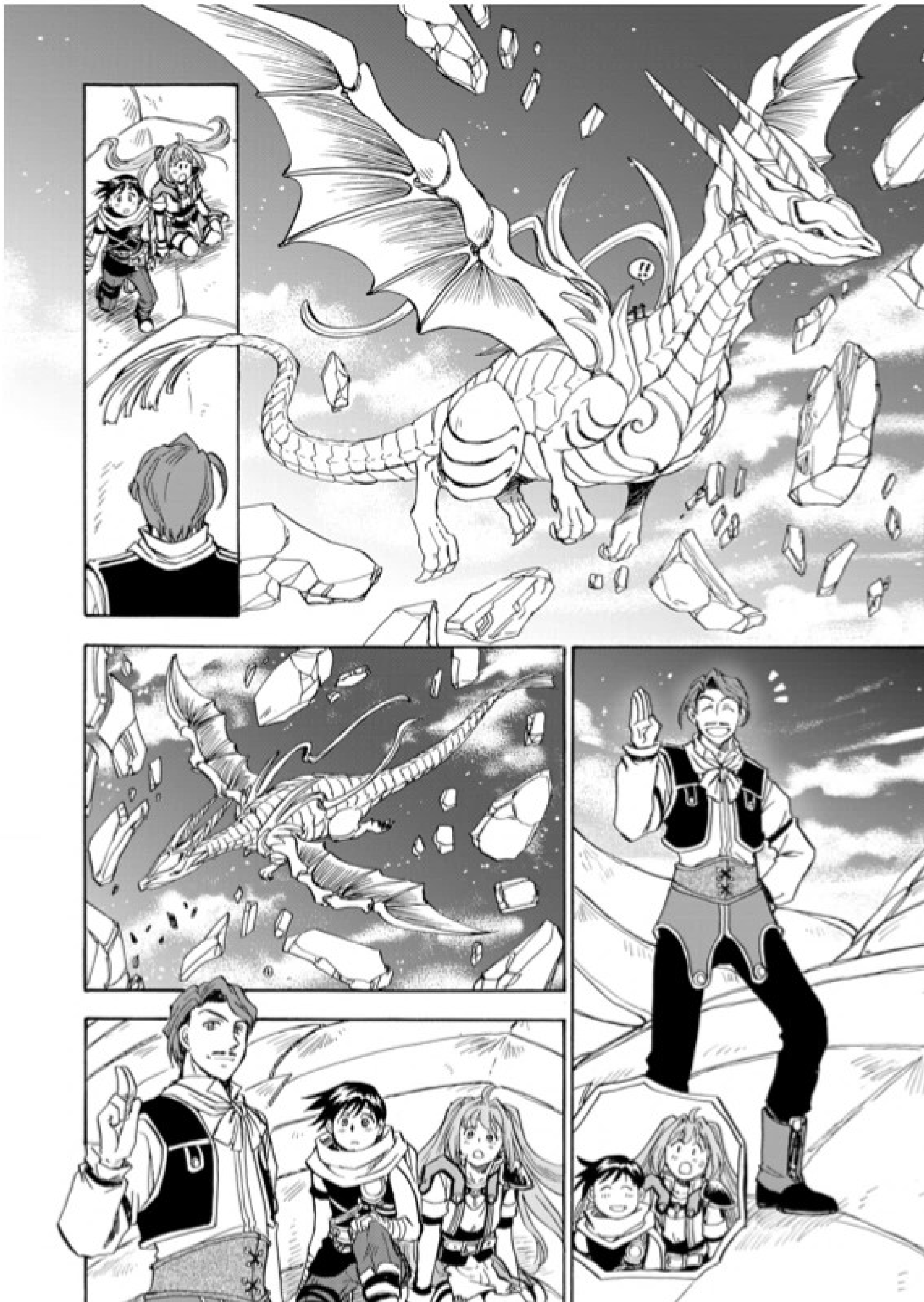
FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



空の軌跡SC
〜絆の在り処〜
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
ぽふ

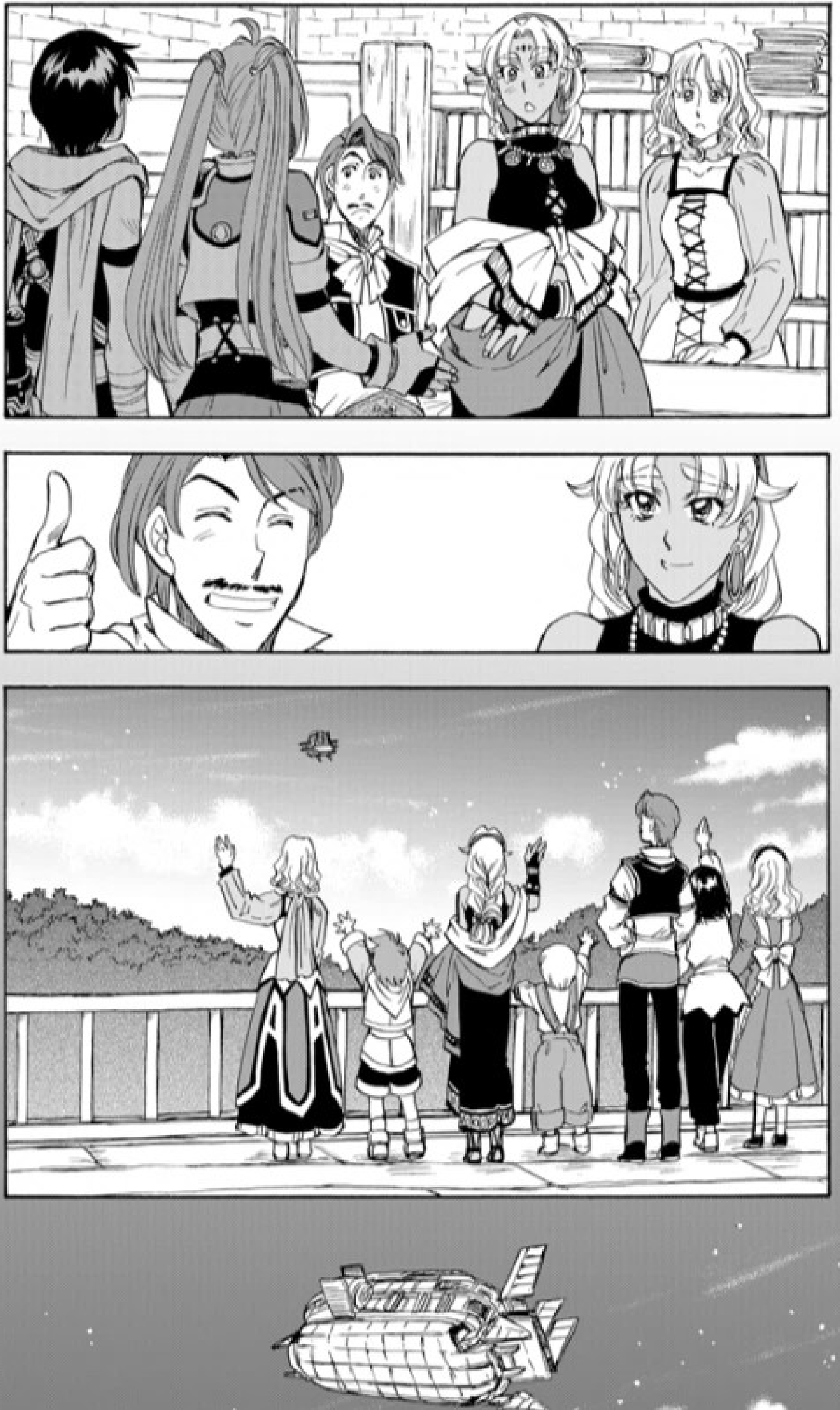







CAPUA






…ねぇ
本当に
いいの？
君まで
リベールを
離れても


え？
大陸全土を
回りたい
…でもそれは
僕の結社時代の
償いのためで…
君を
巻き込んで
いいのか
まだ…正直
迷っているんだ
まったく
もう…
これから先
何が起こるか
わかんないでしょ
そのためにも
あたしは
父さん以上に
強くなって
おきたいの
大きく
出たね…
これは
あたしの
修行の旅でも
あるんだから！
だけど…
それに
約束したし！
気になることも
いっぱいあるし！
見たことない土地に
行くのもすっごく
楽しみだし！
う…
うん…
…って
そもそもね


あたしが ヨシュアと一緒に いるのに
理由なんか 必要?
…うん
そうだね…
…行こう エステル!
うん! ヨシュア!

グリーガーに占拠された島を取り返す『奪還戦』の情報が到着！



シリーズおなじみ『釣り』情報も！

『イース』シリーズ生誕35周年記念作にして、ナンバリング最新作となる『イースX』。今回もまだまだ登場キャラクターが続々と登場。そして今回は、特殊戦闘『奪還戦』や、おなじみのミニゲーム『釣り』の情報が到着した。さらに、アドルたちがオベリア湾を航海する船《サンドラス号》の機能拡張に関する情報も見逃すな！

イースX - ノーディクス -

◆発売日：2023年9月28日
◆ジャンル：アクションRPG
◆対応機種：Nintendo Switch、PlayStation5、PlayStation4
◆プレイ人数：1人
◆CEROレーティング：C
◆価格：［通常版］7,800円（税抜）
［《アドル・クリスティン》Edition］11,000円（税抜）
［ダウンロード版］7,500円（税抜）

グリムソン・バルタ

（CV：山路和弘）　年齢：40歳



オレたちノーマンは常に死と隣合わせ……
生きるってのはそういうことだろォ～？

バルタ水軍・首領にして海賊姫カージャの実父。メドー海で名を轟かせる《隻眼のラドック》に並ぶ海賊と称されており、手下の荒くれ者たちを束ねるカリスマ性とロムン帝国相手に立ち回るほどの高度な政治的判断力を併せ持つ。
感情の昂りを力に変えるノーマンの闘法“ベルセルク化”を自在に制御できる上、優れた戦闘技術を持つ最強のマナ使いでもある。







グンナル

（CV：阪口周平）　年齢：29歳



姫様も、そろそろ支配地の住民たちの生活に
目を向けるご年齢かと思います。

首領グリムソンのもとでバルタ水軍の戦士長を務める屈強な男。
戦士としての腕前はさることながら、常に冷静かつ的確な判断でバルタ水軍の第二艦隊を率いている。
理路整然とした性格でカージャにとっては頭の上がらない相手だが、フェリア同様、グンナルもノーマンとしての彼女の成長を見守っている。







カァーーッ!!

フギル

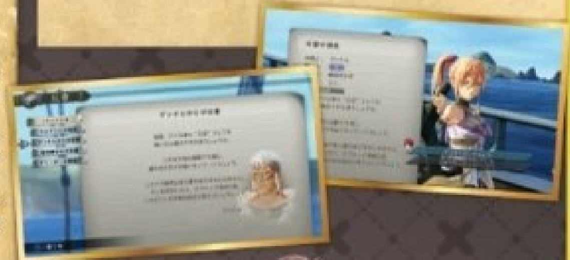
(CV：小林康介)　年齢：♂ ？？歳

いつの頃からかバルタ水軍の拠点・バルタ島に住み着くようになったぽってり体型のワタリガラス。
好奇心旺盛でイタズラ好きな性格だが、「主神ハールがカラスの目を通じて世界の出来事を見守っている」という伝承があるため、ノーマンに大切に扱われている。

POINT

フギルの伝書

サンドラス号での航海中、ワタリガラスのフギルがアドルたちに伝書を届けてくれることがあります。
バルタ水軍からアドル＆カージャ宛の伝書やオベリア湾各地で助けを求める人々の声など、内容は様々。
伝書の内容によってはサブストーリー込みのクエストとして冒険の途中にオベリア湾各地で受けることも可能です。





フレア・ラル

(CV：園部啓一)　年齢：47歳

地上にいられること自体、
私にとって奇跡のようなものさ。

古代王国イースの冒険を通じてアドルが知り合った、ランスの村の医師。
治療のためなら危険を顧みず村の外に出かけてしまうなど、見かけによらずかなりの行動派。
難病の治療に効くとされる《セルセタの花》の原種を求めてアドルの旅に同行しており、旅先でカルナックの診療所を手助けしていくことになる。





モミナ・イヴリーズ

(CV：小原莉子)

レイフ……どうか無茶だけはしないでね。

カルナックの街で露店を営んでいるしっかり者の女性。
人柄が良く近隣住民の評判も良いが苦労性な面があるためか、周囲から気遣われることも。
家族と距離を置き、あまり実家に近づこうとしない息子レイフの身をいつも案じている。



ロメス・カーペント

(CV：富士渕将行)

うははは、ワシらの商売を
邪魔するヤツはすなわち全て悪！

商魂たくましい《カーペント商会》の会長。
オベリア湾随一ともいえる商会の地位をたった一代で築き上げたほどの商才を持ち、息子クルスを商会の跡取りとして育てようと考えている。
周囲でトラブルが起きてもそれを商機と捉えてしまう癖があり、商売人としての在り方を巡ってクルスと言い合いになってしまうことも。





ジョエル・アスラッド

（CV：安原義人）



私たちは"生きている"ということ……この脆い世界における確かな事実だよ。

街で《アスラッド診療所》を開いている医師。
医療に関する確かな知識と技術を持っており、しっかり者の一人娘ミラベルと共に街の人々を長年支えている。
大の釣り好きらしく、仕事中に釣り場へ出かけて行ってしまう程。
そのことが原因でミラベルには何度も窘められているらしい。





アシュレー

（CV：大西亜玖璃）



……ボクはカルナックの奴らと慣れ合う気なんてないからな。

カルナックの街で一人暮らしをしているあどけない容姿の少年。
街の住人に対してあまり良い印象を持っておらず、話しかけてもカルナックへの不満をこぼすなど常に不機嫌な態度で接してくる。
海洋生物には人一倍興味があるらしく、何故かオベリア湾周辺の調査を持ち掛けてくるのだが……。





ウルヴァル

（CV：峰健一）



ヒヒ、下手こいたら船ごと全員チーンだぜ。

《バルタ水軍》に所属しているベテラン船大工。
厳めしい面構えの皮肉屋だが、船大工としての腕前は確かでバルタ島に停泊しているノーマンの船の整備を一手に引き受けている。
アドルとカージャが操舵するサンドラス号の整備を担当するほか、船大工に憧れを抱くクルスにも不器用ながら真摯に接していくようになる。



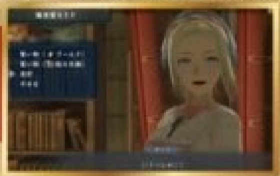


《サンドラス号》の船員を集めて機能を拡張しよう！

冒険の中で出会った人々の中には、今回紹介したモミナやロメス、ジョエルにアシュレーのように、船員として《サンドラス号》に乗船すると船の基本性能が上昇するキャラクターが存在する。ショップがオープンされるほか、特殊イベントやクエストも発生するので、欠かさずチェックしよう。

モミナ／ロメス

店を営むモミナ、カーペント商会の会長・ロメスが船員になることで船内に臨時ショップがオープンする。





アシュレー

オベリア湾各地の海洋生物を調査することが可能に。クエスト達成に応じて海図に情報が追記されていく。





ジョエル

海上で「マグロ釣り」がプレイ可能に。また、釣果を報告すると、様々な報酬が獲得できるようになる。



『奪還戦』

グリーガーに占領された島を奪還せよ！

本作の舞台であるオベリア湾には、グリーガー（不死の亡者）に占領された島が各地に点在しており、航海の中で占領された島を発見し接近すると、島を奪い返すための特殊戦闘『奪還戦』がスタートする。奪還戦に勝利すると様々な報酬を入手できるほか、島をファストトラベルのポイントとして利用することが可能に。さらに海図も更新されるので、冒険がより快適になること間違いなし！

『奪還戦』の流れ

1



サンドラス号で結界に覆われた占領島に接近

2



サンドラス号による海上戦が開始

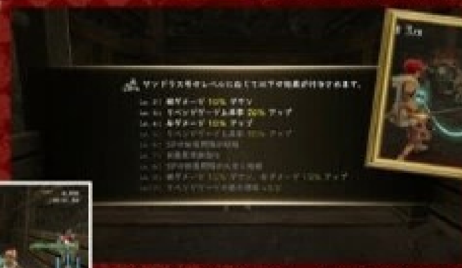
3





海上戦の中で島の周囲に設置されている「バリアピラー」を破壊。これにより島全体を覆っている結界が消滅し、上陸可能に

4

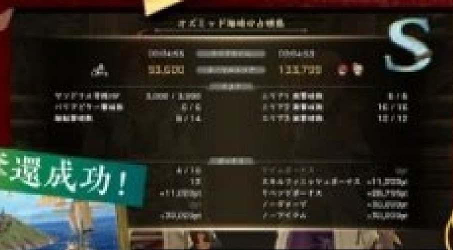






アドル＆カージャで上陸し、敵拠点に攻め込む陸上戦が開始

5



奪還成功！



無数のグリーガーを撃破し、敵拠点を制圧することで島を奪還

POINT

海上戦はミッションをクリアして船員のテンションをアップしよう！

海上戦では、画面にミッションが表示されるようだ。これをクリアすることで船員のテンションが上がり、各キャラに応じた『奪還戦スキル』が発動しやすくなっていく。さらに、海上戦で上げたテンションのレベルに応じて、アドルとカージャが戦う陸上戦の開始時に様々なボーナスが得られるため、後半戦も有利に戦うことができるようになっているのだ。



オベリア湾の各地に点在するパワースポット（？）

『ルーンストーン』を発見して壮大な物語を堪能しよう



オベリア湾の各地を探索していく中で発見することができる『ルーンストーン』。これは、ノーマンの祖先たちが自らの功績や出来事を物語（サガ）として残した巨大な石碑の総称だ。マナの力を持っているアドルやカージャが手をかざすことで物語を読み取ることができ、物語では、新天地を求めたノーマンや、略奪と侵略を繰り広げたノーマンなど、過去にオベリア湾で生きた先祖たちの物語を知ることができるのだ。物語ではカージャら《バルタ水軍》のルーツも明らかになっていくので、本作の物語をより深く理解し、楽しめるようになること間違いなしだ。



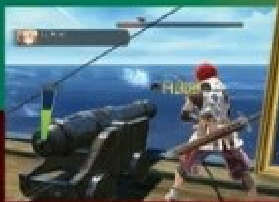




さらに、各地のルーンストーンで物語を読み取る際には、マナの力が共鳴を起こし、新たなマナシードを入手することができる。以前紹介したように、マナシードはアドルとカージャの成長システム「レリーズ・ライン」でのアビリティ習得などに必要になってくるので、ルーンストーンを発見することで、より効率的に2人を強化していくことができるのだ。

各地の水面を要チェック！

釣り＆マグロ釣り

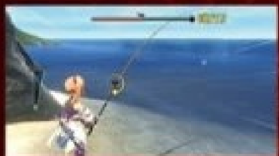




シリーズでもおなじみのミニゲーム『釣り』。今作でも、フィールド、ダンジョン等で水面に魚影を発見すると、釣りをすることが可能となっている。釣りは、餌とスポットを決めてスタート。Hitした後は状況に応じて、ボタン連打やスティック操作などを行うことで、釣りゲージが上昇、最大になると成功となる。また、ジョエルを船員にするとプレイ可能となる『マグロ釣り』は、オベリア湾の各所でランダムに出現するスポットを発見することで、挑戦することができるようになるようだ。











POINT

サポート効果を発動させて成功率をアップしよう！

「釣り」「マグロ釣り」をプレイ中に、画面に表示されるアクションを成功させることで、サポートゲージが上昇していく。このゲージを最大にすると、サポートが発動し、仲間の協力効果が発生、釣りゲージが大幅に上昇し、釣りの成功率が大幅にアップするのだ。

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

「イースX -NORDICS-」オリジナルTシャツ発売中！

FRONTはシンプルに「NORDICS」の文字、BACKにはイースXの舞台となる北の海オベリア湾の中心地、港町カルナックが美しく描かれたイラストをデザインした、普段使いしやすいおしゃれなTシャツです。



※デザインはイメージです。実際と異なる場合がありますのでご了承ください。
※イースXと同時にご購入いただいた場合は9月末の出荷となります。

■発売日：2023年7月27日
■価格：3,850円（税込）
■サイズ：S／M／L／XL
■素材：綿100%
■ファルコムショップ通販
https://falcom.shop/products/list?category_id=20

『コミックマーケット102』工画堂スタジオブースで新作グッズ発売！

8月12日（土）13日（日）に行われる「コミックマーケット102」にて、工画堂スタジオからファルコムコラボ新作グッズが多数発売。工画堂スタジオブースでファルコムグッズをご購入いただいたお客様には、「イースX -NORDICS-クリアしおり（全9種）」からランダムで1枚プレゼント！

ステンドグラス風アクリルキーホルダー



スマホスタンド



アクリルクリップ



特典クリアしおり



■イベント名：コミックマーケット102
■開催日：2023年8月12日（土）、13日（日）
■開催時間：10時30分～16時00分
■会場：東京ビッグサイト（南展示棟）
■工画堂スタジオ出展情報
https://www.kogado.com/sw/contents/hotnews/23summer_c102_edf2eu6.htm

「軌跡シリーズ」フィギュア化企画第1弾「アルティナ」受注まもなく締切！

コトブキヤから2021年に発売され、現在入手困難となっている「軌跡シリーズ」フィギュア化第1弾「アルティナ・オライオン」再生産のご予約がまもなく締切日となります。
この機会をお見逃しのないよう、確実にお求めを希望される方は受付期間内にぜひお申し込みください。







■受注締切日：8月29日（火）
※受注期間以降は上限に達し次第受付終了となります。
■価格：15,950円（税込）
■コトブキヤオンラインショップ
https://shop.kotobukiya.co.jp/shop/g/g4934054057207/
■エビテン ゲームの電撃ストア
https://ebten.jp/dengeki/p/7015024013101

『英雄伝説 黎の軌跡II-CRIMSON SiN-』とヴィレッジヴァンガードのコラボグッズが登場！

人気イラストレーター「てんてこ」さんが、「黎の軌跡II」のキャラクターイラストを描き下ろし！ ノスタルジーを感じる漫画風のタッチで描かれた、クール&POPなヴァンたちのイラストグッズは必見。EC受注＆期間限定販売のグッズなので、お見逃しなく。



■2次受注販売期間
2023年7月28日（金）12時00分～8月20日（日）23時59分まで
お届け予定：2023年10月上旬～中旬
■ヴィレッジヴァンガード公式通販サイト
https://vvstore.jp/feature/detail/20162/
■商品情報ニュース
https://www.village-v.co.jp/news/item/16617

e-onkyo musicとmoraで、2023年夏のミュージックセール開催中！

e-onkyo musicではファルコムハイレゾアルバムが期間限定プライスダウン。さらにmoraでは、ハイレゾ（FLAC）に加え、通常（AAC）配信のファルコムアルバムも期間限定でプライスダウン中です。



■e-onkyo musicセール期間
2023年7月1日（土）～2023年8月31日（木）
■moraセール期間
2023年7月12日（水）～2023年8月21日（月）
■e-onkyo music
https://www.e-onkyo.com/search/search.aspx?label=Falcom
■mora
https://mora.jp/artist/299183/

7月の新／衣装替えキャラクターをチェック！

暁の軌跡

THE LEGEND OF HEROES

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
7月はおなじみの期間限定イベント「ナハトの奮闘記」が開催！
さらに、ミレイユが夏真っ盛りなこの季節にふさわしい衣装姿を披露！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj



水着・ミレイユ

猛暑が続く夏本番を迎え、ミレイユが水着姿を披露！　黒を基調としたセクシーかつ華麗なデザインは、まさに大人な女性のミレイユにぴったりだ。普段はきっちりとした警備服を着ていることもあり、そのギャップの破壊力は抜群といえる。

『暁の軌跡』極秘資料館

「パーティー・レン」衣装デザインラフ
(2022年8月実装)



「水着・ミレイユ」衣装デザインラフ
(2023年7月実装)



期間限定イベントシナリオ「ナハトの奮闘記 Vol.25 キール編」が実装！

カプア特急便のキールから遊撃士協会に呼び出されたナハト。
"とある目的"のために協力員として働いているというキールは
ナハトとともに様々な依頼へと立ち向かう。
キールの目的とはいったい……？









※このイベントは終了しています。

※画像は開発中のものです。※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。


英雄伝説 零の軌跡
FB ファルコムBOOKS
午後の紅茶にお砂糖を
著者:むらさきゆきや
イラスト:窪茶
こんな『零の軌跡』もアリ!?
日本ファルコムの大ヒット RPG『英雄伝説 零の軌跡／碧の軌跡』の主人公【特務支援課】は意外とまったり !? 本編とはひと味違った彼らのゆる〜い毎日を描いて『月刊ファルコムマガジン』で大人気を博したノベライズ作品が単行本で登場！
好評発売中!!
定価:1,100円+税
ISBN:978-4-89610-255-0
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


FB ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！ 新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
ふぁるこむコミックざんまい
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『くるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
価格:本体920円+税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp

■第1話

突撃！　メイベル市長の華麗な一日



英雄伝説　空の軌跡
リベール王国スナップショット

リベール通信の名物コンビ

ナイアル＆ドロシーと巡るリベール漫遊記



第1回

主人公のエステル & ヨシュアがリベール王国はおろか、ゼムリア大陸全体を揺るがしかねない陰謀に対して仲間とともに立ち向かう『英雄伝説 空の軌跡』シリーズ。彼女たちの輝かしい活躍の一方で、それを陰ながらサポートしてきたのが、本作の主人公であるニュース雑誌『リベール通信』の記者ナイアル・バーンズと、新人カメラマンのドロシー・ハイアットだ。本作はそんな２人が生き生きと国内を巡る外伝小説。ぜひお楽しみあれ！

製品情報

好評発売中

著　　　：はせがわみやび
イラスト：西野幸治
定　　価：1,320円(税込)

1

商業都市ボース・北街区。
昼の強い日差しが、通りの石畳を焦がし、道行く人々の足下に小さな影を作っている。
東西に伸びるその通りを、靴音をぺたぺた鳴らして駆けるひとりの少女がいた。
明るい色のブラウンの髪が風になびき、頭の後ろで束ねた黄色いリボンが跳ねている。小さな丸い眼鏡を掛けていた。どこかほんにゃりとしたゆるい雰囲気が漂っていて、急いて走っていてもその印象は変わらない。
と、一軒の店の前で、彼女の首がぐりんと曲がる。
「おおっとぉ」
足をいきなり止めたものだから細い身体が泳いだ。
「っと、とととっと！　あああぁ」
コケそうになったが、かろうじて踏みとどまる。
「はあはあ。と、通り過ぎるところでしたぁ」
ゆるゆるした台詞を吐き、見上げる看板には、『キルシェ』と書かれていた。ボース市の北西にある大きな居酒屋だ。昼はボース市民の食事処として商っている。
切らしていた息を整えつつ彼女は扉を開けて中に入った。

ざわめきに包み込まれる。
二階まで吹き抜けになっている大きな店は昼下がりだというのに客でいっぱいで、肉の焼ける良い匂いと熱気で満ちていた。
天井で五枚羽の飾り風車が、籠もった昼の熱を生ぬるく掻き混ぜている。
お腹がぐーっと鳴る。両手で押さえつつ、彼女は視線を巡らせた。カウンターに座る男の背中を捕まえる。
「センパイ！　ナイアル先輩！」
呼ばれた男が振り返った。
「んぁ？　おまえか、ドロシー。どこへ行ってた。遅っせぇぞ！」
「マーケットですよぅ。ついでに焼きつけを済ませてきちゃいましたから。ほらほら見てください。可愛いです～」
とたた、と走り寄って、ドロシーと呼ばれた少女は肩に提げた鞄から、大きな封筒を取り出す。
「ちょ、ちょっと待て！　それ、写真か？　んなところで広げるなっての！」
「はいはい。だいじょうぶです」
「なわけあるか！」
そう言っても聞かないことは分かっていたので、ナイアルはカウンターの上から慌てて皿を避けてスペースを作る。

「っと、もったいねぇ」
「意地汚いですよぅ、先輩。そんな指についたスープを舐めるなんて」
「誰のせいだっつーの！」
「そんなことはどうでもいいんです」
「よくねぇ！　てか、話を聞け！」
「ほらほら。ボースマーケットですよ！　このコってば、すっごくエレガントなコですよねぇ」
ドロシーが封筒から写真を何枚も取り出して並べ始めた。
狭いカウンターの上がいっぱいになる。
相変わらずの写真バカだ。ナイアルは思った。
いや──。
ナイアルは並べられた写真を見て目を瞠る。
「こいつは……！」
バカと紙一重のほうか。
「どーですか、先輩？」
「どうやって撮った……？」
「えっ。ふつーですよ。ぐるっと回って」
にっこり微笑んで言った。

それらは、ボースマーケットを撮った写真だった。
ボースマーケットは、商業都市ボースを象徴する巨大な百貨店だ。街の北の中心に聳え立ち、百貨の名の通り様々な店がひとつの建物に入っている。
その巨大さは、市の北街区の四分の一ほども占めると言えば判るだろう。
並べられた写真はボースマーケットをぐるっと外から回って撮られたものだった。
ハガキほどの大きさの十枚以上の写真を互いに繋がるように並べているのだけれど、驚いたことにくっつけると切れ目がわからない。一枚一枚の写真が左右でぴったり合わさっていて、建物の外周三六〇度に渡って映されていた。
少しずつ重なるように撮るならできるだろう。あるいは東西南北のそれぞれ正面から撮っただけならば、それもわかる。
だが、これは……。
「おまえ、三脚とか使ってなかったよな？」
「はい？　はい、そうですけど」
きょとんとした顔つきでドロシーが答える。
──それで、このパノラマ写真を撮ってみせたってのかよ！
ナイアルは内心で舌を巻いた。
しかも、東側から撮った写真も西から撮った写真も、きれいに日差しを受けている。という



ことは、こいつは建物いっこに丸一日を費やして撮りあげたってことだ。

目の前の娘、ドロシー・ハイアットは、まだ二十になったばかりだというのに、リベール通信社のカメラマンとして雇われている。オーバルカメラの天才ってやつなのだ。

「マーケットさんは、背が高いだけじゃぁなくて、お洒落さんで、とっても可愛いコですよ～」

とドロシーが言った。彼女の目にはどうやら建物や風景がひとりひとりの人間と同じ個性豊かな表情を浮かべて見えているらしい。

「うまく撮れているじゃないか。ドロシーくんは写真が上手なんだねえ」

カウンターの向こうから『キルシェ』の主人も褒めた。注文をとって、ドロシーの前にもレッドテールスープを置く。

「ありがとうございます～。えへへ」

照れて頭の後ろを掻く仕草はとても天才には見えなかったが。

「っと。そうでした。それで、先輩のほうはどうだったんですかぁ?」

ドロシーの問いかけにナイアルの表情が変わる。苦虫を噛んだような顔になった。

「失敗だ」

「えー?」

「インタビューを受けている時間はない、とさ。取りつく島もねえ」

一方のナイアルのほうはリベール通信社に雇われている記者である。雇用されているのだから社の方針には従わなければならなくて――具体的に言えば、この市の市長へのインタビューを敢行することを命じられていた。

のだけれど、あっさりと断られ……。

「市長さんですもんねえ。お忙しいんですねー」

「そりゃ、そうだろうが……。せめて会うだけでもできりゃよかったんだがな」

あの市長つきのメイドは優秀すぎる。まるで鉄の女だ。会いたいというナイアルの依頼をあっさりと切って捨てて畳んでつき返してきた。

「それとも、また頼み方がまずかったんですか？」

「ぐっ！　……おまえな」

悪気はないのはわかるのだが痛いところを突きやがる。

「先輩、有名人の記事とか苦手ですもんねぇ」

「言うんじゃねえよ！」

たとえ事実でもだ。

ナイアルはあまり人間付き合いが得意でない。コネを操ることもお世辞を言うことも苦手なナイアルにとって、有名人のゴシップ記事ほど苦手なものはなかった。

本音を言えば、事件だ。もっと大きな事件を追いたい。記事を書きたい。そう思う。

だが、インタビューを取らねば社から報酬が出ない。

ミラが無ければ次の街に行くこともできはしない。ここで足止めだ。それどころか、ホテル代だっていつまで持つか。このままじゃ数日後には青空を天幕にした素敵なサバイバルライフが始まることになる。

世の中、万事ミラ次第……せつねぇ。

「消えた飛行客船の行方もまだ突きとめてねえってのに。くそっ！」

拳で膝を叩く。

「仕方ないですねー」

「あのな。おまえも一蓮托生だってこと忘れるなよ？　記事が取れなけりゃ、写真の経費は落ちないからなっ」

「ええっ!?　それは横暴ですよぅ」

「当たり前だっつーの、このトンチキ娘！」

「ううん。困りましたねー。けっこう、いっぱい撮ってしまいました。これからの焼きつけ代だけでも、ええと……。とにかくいっぱい掛かりそうなのに」

うーんうーんと唸るドロシーを横目で見ながらナイアルはカウンターに頬杖をついた。

さて、どうしたもんかな、とつぶやく。

「あ、そーいえば……」

「うん？」
「その市長さんですけど。マーケットで聞いた話では、よくひとりきりでお店を視察しているって」
「ひとりきりで、だと？　市長が？」
まさかと思ったのだ。ボースは充分都会だ。王都グランセルに比べれば小さいとはいえ、この街で市長が供も連れずに歩き回ってるって？
「ああ、メイベル市長はそういう方ですよ」
答えが意外なところから返ってくる。カウンターの向こうで店主が皿を乾いた布でこすりながら言ってきた。
「マジか？」
「はい。まだお若いのに、前の市長であったお父様を亡くしてから立派に市長の職を継いでらして……。その商才というか、経営の手腕は父親をしのぐとのもっぱらの噂です」
「ほー。すごいんだな」
思わず、という感じで漏らしてしまったひとことだったけれど、自らの市の市長を褒められてよほどうれしかったのか、彼は延々とメイベル市長がいかに素晴らしいかについて語りだした。
曰く、商業都市ボースが近年著しく貿易利益をあげだしたのは市長がきめ細やかに貿易品を

監視しているおかげである。安く買って高く売る。商売の基本を忠実に実行しているだけなのだが、その簡単なことが実は難しい。
メイベル市長はボースと他国の間で売り買いされているあらゆる品目について常に目を光らせているのだという。
店長は延々と語り続けた。
さらに市の経済の中心であるボースマーケットは、メイベル市長自身がオーナーであることもあって、自ら視察を繰り返している、と。
「オーナー……経営者だって？　あのでかい店の、か」
店主に頷かれてナイアルは言葉を失う。
「メイベル市長って、まだ若かったよな？」
「確か、二十一とか」
「に……にじゅういちぃ？」
こいつとたいして変わらない……だと？
「な、なんですか、先輩。その目はいったいなんですかぁ」
思わず振った視線の先で、ドロシーが走って乱れた髪をなでつけ、リボンを引っ張って整えていた。眼鏡の弦を中指で押し上げてお澄まし顔をしてみせる。また無駄なことを。そんなんでしっかり者に見えたら苦労はない。

しかし……。二十一で市長を勧めるだけでも信じられないが、その上で街で一番でかい商業施設ひとつの経営者……だと？
「すげえ、な……」
「だろう。しかも、それだけじゃない」
「ほう」
「美人なんだ」
「………………だから、どうしてそこで落ち込んでやがる、ドロシー」
「しっかり者で美人さんなんてずるいです……」
「おまえ、今までそんなの気にしてたことねーだろ⁉」
「でもなんとなく、ですねぇ」
「あのなぁ。カメラマンはおまえしかいねーんだから、しっかりしてくれよな」
「はぁ……はい」
――ま、放っておくか。いつもみたいにそのうち立ち直るだろうし。
「なるほどな。市長にとっちゃ、マーケットの視察も仕事というわけか……」
そのとき、ナイアルの頭にひとつのアイデアが閃いた。
「そうか……ひとりで視察、ね……」
よし、と腹をくくる。

インタビューを申し込んで断られた以上、正攻法では市長の記事は書けない。ならば、ボースマーケットに潜入して、その視察の様子ってやつを見てやろう。
まるでゴシップ記者のようだが、背に腹は換えられない。
記事のタイトルも思いついた。
『突撃！　メイベル市長の華麗な一日』
まるで大衆雑誌の見出しのようだが、それくらいのほうが割り切って書ける！　……気がした。たぶん。
おし、とナイアルは気合を入れる。残っていた真っ赤なスープを飲み干すと、さっそく取材の段取りを考え始める。
「ドロシー」
「はい。なんですか、先輩？」
「おまえ、こっそり盗み撮りってできるか？」
このときナイアルは、自分の次のひとことが思わぬ波紋をもたらすなどとは思っていなかった。
あくまでも気軽に、カメラの天才に聞いただけのつもりだった。
「……へ？」
オーバルカメラの手入れを始めていたドロシーが振り返る。困惑の表情のまま彼女は固まっ

ていた。

2

「困りましたねー」

真夜中近く。フリーデンホテルの自らの部屋で、焼きつけた写真の整理をしながら、ドロシーは先ほどから何度も同じ台詞を繰り返していた。

「大丈夫でしょうかぁ。はあ。っと、これは可愛いコですから、こっち」

一枚の写真を机の右手に重ねる。ルーアンの街の時計台を写したものだ。

「これはかっこいいコだから、こっち、っと」

左側に重ねたのは岬の灯台の写真で、右上隅の空に一羽のカモメが映りこんでいる。

写真の差は余人にはさっぱりわからないものの、ドロシーには明らかなようで、独自の基準で迷うことなく振り分けていく。

大量の写真を仕分け終わると、それぞれを封筒に入れて整理する。ひととおりの作業を済ませてから、ドロシーはふたたびため息をついた。

「困りました……」

何度目になるかわからない呟きを繰り返す。

ナイアル先輩が名物市長の記事を欲しがっているのは理解している。書かないと報酬がもらえない、わけだ。ドロシーにとっても困ることで、なにしろ写真というのはそれなりにミラがかかる。

けれど……。

自分に隠し撮りなんてできるだろうか？

先輩は言っていた。「ゴシップが書きたいわけじゃねえ。紙面に載せる前にちゃんと許可は取る」、と。

あくまで市民の目でありのままの市長の働きぶりを見守り、記事にしたいだけだ、と。そう言いつつも目が泳いでいたから、ナイアル先輩にとっても不本意で後ろめたさがあるようだけど……。

メイベル市長の振る舞いを自然に撮ってくれればいい、と言っていたのだ。

けど、問題はそこではない。

「わたし、静かに写真なんて撮れるんでしょうか？」

自問自答してしまう。

ドロシー・ハイアットはカメラを構えたときに黙っていた記憶がない。

というか、ありていにいって――うるさい。

と、しばしば言われる。

「でも、ご機嫌よくしてもらわないと、よい顔はしてくれませんしねぇ」
モデルが、静かに佇む木々であろうと、物言わぬ古代遺跡であろうと、よい気分になってもらってこそ、素敵な表情を撮ることができる。ドロシーには当たり前のことなのだけれど、あまり周囲の理解は得られていない。
それでも、いつも精一杯もてなしてから、シャッターを切っている。
もはや自分がそんなことをしているなんて意識にさえ昇らないほどに。
だから——こっそりと、なんて……。
「できるんでしょうかぁ？　はあ」
明日は早い。ナイアル先輩と待ち合わせた時刻は日の出よりも前だった。
とまどいを抱えたまま眠りにつき——。
夜が明ける少し前にドロシーは目が覚めた。
胸の内の不安は倍の大きさに膨れていた。

3

綺麗だぁ、とドロシーはその屋敷を見て思った。
メイベル市長の暮らす邸宅は、個人の住む建物としては、おそらくボース市でもっとも大きいもののひとつだ。
二階建てで、南の棟だけは窓を見る限り三階まで存在する。
壁一面が白い石を組み上げてできており、昇って間もない柔らかい朝の光が、壁を薔薇色に染めていた。まるで頬を赤らめている貴婦人のように見えた。
張り出し窓は大きなガラス入り。きらきらと朝日に光っている。
今すぐにシャッターを切りたい。
ドロシーは思ってしまう。うずうずする。
「ダメだ」
「まだ何も言ってないですよぅ」
「だったらカメラを降ろせっての！」
「はっ！　つい」
いけないいけない。いつの間にか構えていた。
ドロシーとナイアルは市長宅の門が見通せる通りの角に潜んでいた。
日の出前からココに突っ立っているから、そろそろ足が痛くなってきている。お腹も空いてきた。眠気だって——
「ふわわわ～」

「声を出すなっつーの！」
「んぐっ……うう、ふぁぁああ。む、むりふぇふよぉ」
　それでも欠伸を噛み殺そうとしたら、目尻に涙が浮いた
「おまえな。今日の獲物は建物じゃねえって言ってるだろ！」
　ぺしっ、と頭をはたかれる。
　目じりに浮いた涙が零れた。
「女の子の頭をぽんぽん叩かないでくださいよぅ」
「何がですかあ？」
「おれは後輩には厳しい先輩でありたいと思ってるんでな。……しかし、動きがねえな」
「おかしい。いくらまだ朝早いからって、市庁舎のほうに向かうにしても、お忍びで視察に出るにしても、そろそろ動きがあっていいはずだ。おい、なんか見えるか？」
「わたしのカメラは遠眼鏡ではないのですけどぉ」
　ぎろっと睨まれて、ドロシーはカメラを抱えなおした。
　オーバルカメラは小さくても、導力革命以後の最新技術が詰まった精密機械だ。レンズの部分にだけは古い匠の技が使われているけれど、内部装置や記録媒体には七耀石を組み込んだ最新の結晶回路が使われている。
　鞄から望遠用の交換レンズを取り出してカメラにセット。屋敷にレンズを向け、遊撃士の使

う導力器に似た（ただし、大きさは五分の一ほど）円盤を指先でなぞりあげれば、カメラの後ろにある投影板にレンズを通した画像が現れ、ピントを結んだ。
　ドロシーは、機械だけに頼るのは好きではなくて、ファインダー越しにマニュアルでセッティングするほうが好みなのだが、今は先輩に見せなければならないから仕方ない。
　投影板に、一階のガラス窓越しの室内の様子を写しとる。
　ピントＯＫ、絞りもチェック。ん。ばっちりだ。このままシャッターを切れば——。
「っと、撮影するのではありませんでした」
「なんか見えるか？」
「こんな感じですけど」
　投影板に映し出された画像をロックしてからナイアルに見せる。記憶子には保存してないから、ロックを解除すれば映像は消えてしまうが、今は問題ない。
　食堂らしきところで屋敷の使用人たちが集まっている光景が写っている。
　こんなことをしていると、まるで遊撃士か街の自警団の張り込み捜査みたいだ。
「片づけてやがるな」
「そういえば、のんびりした感じですねー」
　互いに笑い合いながら、テーブルを拭いたり、食器を抱え持ったり、すっかり朝食後のひとときという感じ……。

「あれ？　あれれれ？　そろそろ朝食のお時間というところだと思うのですが」
「……さては！」
顔色を変えたナイアルが角から飛び出すと、屋敷の門柱に飛びついた。
呼び鈴を鳴らしまくる。
険のある表情を浮かべ、ひとりの若いメイドが出てきた。不機嫌そう。美人が怒るとちょっとおっかない。
「またあなたですか。記者ナイアル・バーンズ殿。メイベル様へのインタビューは昨日お断りしたはずですが」
「市長は？」
「ご用件は？」
「いるのか！　いねーのか！」
「ご用件は？　どのようなご用件でしょう。アポイントメントはお済みですか？」
——すっごい、このひと。
ドロシーは内心でだらだらと冷や汗を流しまくりつつ一歩引いて見守ってしまう。
心臓がドキドキしていた。
ナイアル先輩は、決して恐ろしげな風貌をしているわけではない。目つきこそちょっと怖いけれど、体格はふつう、というかやや細めだし、筋肉だってついてない。

安売りで買ったよれよれのシャツを胸元をだらしなく開けて、いつもネクタイをゆるく巻いている、一歩間違えれば失業中のおじ——お兄さんみたいななりをしているだけのふつうの青年だ。
が、だからといって、目の前のメイドさんから見れば、年上の男の人なわけで……。こうまでクールにあしらえるものだろうか。
ナイアル先輩を足下を歩く蟻か羽虫のような態度できっぱりはっきり応対してる。
「だから、家にいるのかって聞いている！」
先輩も負けてなかった。
まだまだしぶとく粘っていた。
ジャーナリストの鑑かも。ドロシーは素直にそう思い、ふと気づいた。
あれ？
——いま、このひと、すこし笑いませんでしたか？
頭に血を昇らせているナイアル先輩はまったく気づかなかったようだが、ほんの少しだけ何かを企んでいるかのような笑みがメイドの口許に浮かんだ、ような。
「市長は、もうお出かけになられました」
それまで頑なにナイアルの問いかけを無視していたメイドが言った。
「どこへ！」

「さあ――」
余計なことは話さない口数少ないメイドが言った。
「ただ……本日は公務は入っておりません」
言外に、市庁舎には行ってないと匂わせた。ナイアルが「マーケットか！」と短く叫ぶ。
「出遅れたか。行くぞ、ドロシー！」
「は、はいですぅ！」
駆け出した先輩を追って、新米カメラマンは鞄を抱えなおして走り出した。
ふたりの背中を見送ったメイドが「では、こちらも準備を始めましょうか」と小声で呟いたが――。
午後の風にさらわれたその声が、ナイアルとドロシーの耳にまで届くことはなかった。

4

ボースマーケットは四方を大通りに囲まれた、上から見ればほぼ真四角な形をした建物だ。通りに沿った白亜の壁沿いには季節の花を植えたプランターが置かれ、道行く人々の目を楽しませていた。

マーケット西側の入り口。
ドロシーとともに佇み、ナイアルは建物を見上げる。
「ったく、こんなに高くつくる必要があったのかねえ」
市の北側の四分の一ほども占める広さがあるのだから、それだけで充分な店が入ることができる。事実、中は吹き抜けの平屋で、二階さえない。
それなのに、屋根は三階ほどの高さにある。
「中に噴水までありますから」
「いやそれおかしいだろ。そこまで吹きあがらねえぞ⁉」
後輩の言葉に思わずナイアルは突っ込む。
百貨店の中央にちょっとした広場と噴水があるというのは、確かにすごいことだとは思うが、だからといってこれだけの高さは必要ないはずだ。
「薬局も青果店も金物屋も入ってますよー」
「だからそーいう問題じゃ――ええい、入るぞ！」
出窓のように半円をした形の正面のガラス扉は、真ん中から左右へと回るように開く面白い構造をしていて、しかも人を感知して自動で動く。こんなところにも、導力革命の成果を見てとることができた。きっと、導力器を使っている。
西から入ると、右手すぐには洋服屋、左手は雑貨屋が商いをしている。そこを皮切りに、店

内のずっと奥まで異なる店が延々と連なり様々な品々を並べていて壮観のひとことだった。
つまり、ここは『ボース市の市場』なわけだ。『ボースマーケット』はひとつの店の名前ではなく、建物につけられた名前ということ。メイベル市長が持っている権利というのは、この建物への出店を許可する権利であり、彼女は市場の管理人である。
「ほんとにたくさんのものを売ってますよねぇ。それに人がいっぱい」
「キョロキョロしてんなよ、首が痛くなるぞ！」
「ですよねー」
真顔で頷かれた。
……痛めたことあるのかよ、こいつ。
しかし——この中から、市長を探すのか……。
しかもお忍びでボースマーケットに来ている、というのは当て推量であって確証はないわけだった。
一瞬、やめちまおうかな、と弱気になるが、ナイアルはかろうじて思いとどまる。一文無しで野宿は嫌だったし……。
——大体、おれはそれでもかろうじて耐えられるかもしれねぇが。
ちらりと横に立つ相棒を見る。
——こいつは無理だろうしなぁ。

「先輩、どこから捜しましょう？」
「あー」
盗み見たとたんにこちらに顔を向けられて、ぎくりとしてしまう。ほんの少しだけナイアルはうろたえた。相変わらず人の視線には聡いやつだ。カメラマンの習性なんだろうか。
「とりあえず、ぐるっと回ってみる」
「はい～」
ゆるい返答に、だいじょうぶか？　と不安になりつつ、ナイアルは店内をゆっくりと見て回り始め、しばらくして気づいた。
そういえばまだ市長の顔を知らなかった。
——意味ねえじゃねえかよ！
図書館か市庁舎にでもよって、紳士録（フーズ・フー）でも見ておくのだった！
「あれ、すごいですねえ」
ドロシーの声にナイアルは顔をあげる。
ほらほらと指差すほうを見ると、金物屋の店先だった。金物だけでなく、皿や鍋などの陶磁器も売っているらしい。平台があって、『特売』と書かれた貼り紙とともに白い簡素な皿がうず高く積まれていた。
「てか、積みすぎだろ、おい！」

視線より高いところに一番上の皿がある。ナイアルが手をいっぱいに伸ばしてかろうじて届くかどうかというところだ。
なんだかゆらゆらと揺れているような気さえする。
「おいおいおい。やばくねぇか、あれ」
しかも、恰幅のいい女性がひとり、目を輝かせながら「安いわぁ」と言いつつ、強引に白い皿の塔の中ほどから一枚抜き取ろうと――って、無茶だ、それは！
「せせ、先輩！」
「馬鹿が！」
――くそっ、派手に揺れてやがる！
客にぶつかりながらも駆け出したが、とうてい間に合いそうもない。
「だめですよ」
涼やかな声とともに、揺れていた皿の塔がぴたりと静まる。
ナイアルの足が止まった。
人波の向こうに、皿の塔を支える女性の姿が見えた。
栗色の髪をした二十歳ほどの少女だった。リボンの色と同じ赤い上着を羽織り、胸元を大きな青い宝石で留めている。ピンク色の内服にはひらひらがついていて、なんだかとても高そうだ。

「あぶないですから、こういうときは店員を遠慮なく呼んでくださいね」
そう言いながら、皿を抜き取ろうとした女性ににこりと微笑む。不満げな顔つきに一瞬だけなったものの、彼女は自分を咎めた相手が誰だか判るにつれて表情を変えた。
「し、市長！」
「はい」
「もも、申し訳ありません！　あのそのあの……」
「いいえ。あなたにお怪我がなくてなによりですわ」
――市長、だと⁉
数歩前でかろうじて止まったナイアルは慌てて陳列棚の影に潜んだ。「せ、先輩」と声をかけながら近づいてきたドロシーの頭を抑えこんで自分と同様に隠れさせる。
「むぎゅ」
「声を出すなっつーの！」
――あれが、ボース市の市長、メイベルか。
本当に若かった。しかも美人だった。
メイベル市長は店員を呼んで客の相手をさせると、そのまま自分は店主を店の裏まで連れて行って、危険な皿の塔をやめるように言い聞かせた。
「この並べ方は危険です。お客さまが怪我する可能性があるわ。改善するように」

柔らかい声だが、有無を言わせないきっぱりとした物言いに、金物屋の主人が平謝りする。
「あなたがいつも安い品を苦労して仕入れてきてくれるのは知っています。だからこそ、こんなことでお店の評判を落としてはいけないわ。ね？」
「あ、ありがとうございます！」
大声の持ち主の店主はそう言いながら、ぺこぺこ頭を下げた。
あれだけ声を張り上げてしまっては、せっかくメイベルがバックヤードに連れて行っても意味がなくなってしまう……。
それでも誰ひとり嫌な思いをさせることなく収めてしまった市長の行動にナイアルは舌を巻いた。本音では二十一の小娘にどれほどのことができるかと——侮っていなかったと言えば嘘になる。
「ドロシー。撮ったか？」
「んーんーんー」
「っと！　わりい」
しまった。口を塞いで棚の隅に押し込んだのは自分だった。忘れてた。
「んふぁぁ！　はあはあはあ。ひ、ひどいですよぅ、先輩。はぁ。苦しかった」
「いいから、声を抑えろっての。カメラだ、カメラ。何枚か、撮っとけ！」
「は、はい」
「静かにだぞ！」
「う、ひゃい！　わわ、わっかりましゃ……まひた」
きゅっと口を結び、かろうじて半身が見えている市長へとカメラを構える。もちろん棚の陰からだ。口を開いては閉じ、開いては閉じた末に（声を出さないように葛藤してるのだろう）、シャッターを押し込み、何枚か写真に収めた。
バックヤードから出てきたメイベルは、そのまま店の巡回を続けるようだった。ナイアルもドロシーと共に隠れつつ後をつける。
金物屋から雑貨店へと移動。市長はそこでまた足を止めた。
書棚の前を行ったり来たり繰り返している青年がいて、困った顔をしたままチラチラと店主の方を見ている。
探し物をしているようだが、あいにく店が混んでいて、主のほうは気づかない。
メイベル市長がそっと近づき、青年に声をかけた。
「本をお探し？」
声をかけられた青年は市長の顔を知らないようだった。旅行客らしく、話しているうちに、商売を学ぶために商業都市ボースにやってきたとわかる。
「それでしたら、お勧めはこれかしら」
書棚から一冊の本を抜き出して見せる。

軽く本の説明をしてから、それ以外にも数冊を選んでみせた。
——まさか棚の本をぜんぶ覚えてるわけじゃねーよな?
それは無いだろうとは思ったが、淀みなく選択するってことは、恐らくは自分も学ぶときに使った本なのだろう。経済発展を続けるボースの敏腕市長の推薦本とも気づかずに、青年は感謝の言葉を述べて売り場に向かった。
「はあぁ、なんだかすごい人ですよぅ」
「まあな。って、おい。今のはちゃんと撮ったか?」
「はぁ。まあ、その……撮りました、けど」
「けどなんだよ」
「なんか……ヘンなんです、ケド」
「何が変なんだ?」
「んー。……なんか、です」
要領を得ないドロシーの返事にナイアルは許しむ。
だが、問い正している余裕はなかったのだ。メイベル市長がふたたび視察を再開させてしまっていた。
ドロシーの言うことも気にはなったが、混雑するマーケットの中で見失ったら、再度見つけるのは難しいに違いない。
「くそっ! 追うぞ!」

5

ドロシーは苦労していた。
いつもと違うやり方でカメラを構えているせいなのか。それとも何か他に理由があるのか。全然うまく撮れない。撮れる気もしない。
——こんなにうまくいかないのは何故なんでしょう?
あまり人物写真というのは撮らないドロシーだけれど、決して苦手というわけではなかった、はずだ。
人も自然も静物も変わりはしない。
よい——そのコらしい素敵な表情をしていたら、それをカメラに収めるだけ。
の、はずなんだけど……。
今ファインダー越しに見えているのは、ボースの市長、メイベルの姿だった。
財布を落とした客がいて、目ざとく落ちる瞬間を見たメイベルが拾って追いかけて、まさに渡すところ。
ちょっと走って追ったのでドロシーは息が切れている。

深呼吸してからファインダーを覗き込んだ。
　またた。
　ドロシーがカメラを構える。ファインダー越しに彼女の姿を捉えて、ピントを合わせ、絞りを決めて、まさにシャッターを押し込もうとしたその瞬間。
　すっとメイベルが顔を背けてしまった。
「あ……」
　これでは撮れない。
　いや、撮ってもいいのだけれど、それでは新聞には載せられないだろう。後ろ向きの肖像写真じゃしょうがない。仕方なしに再び集中して次の機会を待つ。
　市長は半身にしていた身体を回転させ、一歩、二歩立つ位置を変えてから、顔をこちらに向けた。
　——ああん、もう！　なんでですかぁ！
　絶好のチャンスなのだけれど、前の人、邪魔です！
　けれどもう、財布を渡す瞬間はそのときしかなくて、仕方なしにドロシーはシャッターを切った。
「あううう」
　失敗だ。表情はばっちり撮れたけれど、トリミングをしないかぎり、余計なものまで写ってしまっている。
　どういうことだろう？
　こんな失敗は今までした経験がない。
　覚えがない。
　いつだって写すべき相手にあれこれ話しかけているうちに「いちばんいい瞬間」が訪れてくれた。その瞬間にシャッターを押すだけでばっちりの写真が撮れたのに……。
　迷子が泣いていた。
　泣き声に反応したのはやっぱりメイベルのほうが先で、男の子に駆け寄ったメイベルはあやしつつ手を繋いで両親を探し始めた。ナイアルと共にドロシーは後をつけるしかなかった。
　ちょっと心配しつつ。
　でもすぐに親が見つかって、ほっとしたドロシーはカメラを構えた。
　物陰から様子を伺っているうちに、再び違和感がくる。
　——あれれ？
　なんだろう、あの人。
　今度は市長の向こう側に妙な人がいる。
　妙、と思ったのは、その男が何も見ていなかったからだ。ファインダー越しでもドロシーに

は彼の視線が近くの商品のどれも捉えていないのがわかる。
——なんであの人、店の奥なんて見ているのでしょう？
レンズを動かして、ピントを背後の男に合わせているうちにドロシーは気づいた。男の着ている服がおかしい。
「可愛くないですよぅ」
と、思わず呟いていた。
センスの問題ではない。ドロシーにはわかる。あの服はあの男の趣味ではない。自分で選んだ服じゃなくて、でも、どうしてそんな服をわざわざ着て、洋服屋なんて見ているのだろう？
「おい！　撮ったのか？」
先輩の声に我に返る。
「はは、はい！」
シャッターを切ってからドロシーは気づいた。しまった、ピントがそのままだ！
——何やってるんだ、わたし！
とんでもない失態だった。慌ててピントを市長に合わせなおしてから撮る。
けれど、そのときにはもうメイベル市長はかしこまった顔になって感謝して頭を下げる夫婦に向かって、子どもの手を離してはいけませんよ、と諭していた。
その前の、子どもに「よかったね」と微笑みかけたときのほうが、絶対いい顔だったのに！

ずーんと落ち込んでしまう。
「あれぇ、どうしたの、ドロシー」
聞き覚えのある声に顔をあげた。
「あ……エステルちゃん……」
遊撃士のコンビ、エステルとヨシュアだ。
「マーケットでお仕事？」
「あ、うん。そうなんだ～」
ニコニコした顔のエステルに負けじとドロシーもなんとか笑みを作る。さすがにこのふたりの前で落ち込んだ顔なんて見せられない。
長い髪を左右でおさげにした少女がエステル・ブライト。王国では珍しい漆黒の髪と琥珀色の瞳を持つヨシュアはその弟だという。ふたりともドロシーよりも年下なのだ。
少し前に知り合ったこの遊撃士コンビは、行方不明の父親を探すために王国内を旅している。
そんな彼らが元気なのに、自分が落ち込んでいるところは見せられない。
「そっかー。お仕事、大変みたいね」
と言って、エステルがにこっと微笑む。
「いえいえ～。それよりエステルちゃんたちは……？」
「僕たちは買い出しです」

「ちょっとハーケン門のほうまで行かなくちゃいけなくなってさ！　ほら旅をするにはそれなりの支度がいるじゃない？」
「でも、そのお菓子は余計だと思うけど」
　愛用の棍を背にした遊撃士の少女に向かって、ヨシュアが冷静に突っ込んだ。エステルは左右の手にふわふわのカステラを持っている。
「ふっふっふ、ヨシュア、このエステルさんがいいことを教えてあげるわ」
「……一体どうしたのさ」
「いい？　この世にはね、『腹八分目じゃ戦えない』ってことわざがあるのよ！」
「そんなことわざ無いと思うんだけど」
「いいの！　あるったらあるの！　なかったらつけておいて！」
「つけが利くのか……」
「これは女の子の真理なんだから！」
「はぁ……君の気持ちも分からなくはないけど、僕たち遊撃士にとって食べ過ぎは危険じゃないかな？」
「き――きけん？」
「命の危険ってこと」
「な、なによ。それってどういう……」

「戦いのときの立ち回りに支障が出る、かもしれないだろ？」
　ヨシュアのまわりくどい言い回しに気づいたのはドロシーのほうが先だった。思わず口にしてしまった。
「つまり、エステルちゃんがカステラの食べ過ぎでふっくらモチモチしちゃうってことか～。それはそれで可愛いかもですねぇ」
「あ、あんですってぇ～～～！」
　ヨシュアに向かって手を振りあげ、その手がカステラを握り締めていることに気づいて手を下ろした。
「僕は言ってないけど」
「ううう～～」
　唸りながらエステルがヨシュアを睨みつける。
「うふふ。相変わらず仲がいいんだね～」
「へ？」
「うらやましいなぁ。兄弟っていいよねー」
「あ、うん。よく言われる。えへへ」
「仲良きことは良き哉だよ～」
　エステルはドロシーの言葉にありがとう、と笑顔になり、そんなエステルを見てヨシュアが

肩をすくめつつ、優しい笑みを浮かべた。

「おおい。ドロシー！」

声に振り返る。ナイアル先輩がいつの間にか移動していて、北側出口に向かう通路のほうから呼んでいた。

「っと、先輩が呼んでるみたいだから、またね～！」

遊撃士コンビに別れを告げて、先輩のほうへと駆け寄る。

「あの、今エステルちゃんたちが――」

「ああ、見えた。それより、今日はもう退散するぞ。そろそろ夕方になるし、市長も姿を消しちまった」

「えっ。見失っちゃったんですか？」

そう言ったら、苦々しげな顔つきになった。まさか、ナイアル先輩がまかれちゃうなんて。

でも、とドロシーは思った。ちょうど良かったかも。

今日はろくな写真が撮れなかった。仕切りなおしたほうがいい気がする。でも、次は、きっと……！

うん。エステルちゃんたちのおかげで少し元気になれたかも。

「ホテルに戻るんですか？」

「ああ」

「じゃあ、わたし、ちょっと今日撮ったぶんだけ焼きつけてきちゃいます」

自分的には決して満足できない写真だが無駄にはできない。写真が記事に採用されるかどうかを決めるのはドロシーではないのだ。

「その必要はありません」

凛、とした声だった。

顔をあげると、どこかで見たような……メイドさん？

「あんたは……」

「わたしは『あんた』などという名前ではありません。記者ナイアル・バーンズ殿。リラ、と申します」

いつの間にか目の前に立っていたのは朝に市長邸で出会ったメイドだった。

「オーバルカメラをお預かりさせていただきます」

「んだとぉ？」

ナイアル先輩の悪い目つきが増し増しに悪くなった。まるでこれから喧嘩をする前の不良さんみたいな目。ドロシーにはあまり見せたことがない。

「これは保安上の処置ですので、ご了承願います」

そう言うリラの後ろに、ずらりといつのまにか街の自警団が並んでいた。

否も応もなく、ドロシーのカメラは取り上げられ。

何もわからないまま、ふたりとも、マーケットの外へと放り出された。

6

ドロシーとナイアルが外に出ると、もう夕焼け時だった。
太陽は西の街並みの向こうへと沈んでしまい、見えているのは赤く染まった雲だけ。ちょっと不吉な色合いだけど、でも綺麗だ。
カメラは没収されてしまったから、撮ることはできないけれど、せめて……。
ドロシーは、直角にした両手の親指と人差し指を使って四角い枠を作り、空に向ける。ファインダーの代わりだ。
心のシャッターを切ろうとして――愕然となった。
空が……。
呆然としつつも、足は動き、先輩の後をついていって、辿りついたのは、居酒屋『キルシェ』だった。
扉を開ける。昼とは雰囲気が違っている。もう夕方だから、本来の居酒屋としての営業が始まっていた。料理の匂いに酒の匂いが混じっている。
奥の席を取り、夕食にした。ナイアル先輩は不機嫌そうな顔のまま酒を注文し、ドロシーは

あまり食欲がわかずに、チーズリゾットをとる。
しばらくはふたりして黙々と口を動かして……。
ナイアルの杯が空になり、二杯目が注文される。ドロシーが食べ終わったのを見計らって、彼は煙草を取り出した。
咥えた煙草に火をつけながら「どうした?」と尋ねてくる。
「お空がどんな顔をしてたのか判らなかったんです」
ドロシーの答えを聞いたナイアルは一拍間を置いてから「さっきの夕焼けか?」と言った。
「はい」
「そりゃ、酔っ払ってたんだろ」
赤かったんだから、と続ける。
そうだろうか? 真面目に検討しかけて、目の前のナイアルがくっくっと笑っているのを見て、からかわれたのだと気づいた。
「……真面目な話なんですけどぉ」
「珍しいな」
「は?」
「おまえが、写真のことで俺に尋ねるなんて、って思ったんだよ。俺は記者だぞ」
だから判るわけないだろ――と暗に言っている。

言われてみればその通りだ。どうかしてる。誰かに相談したことなんてなかったのに。

「どうした、スランプか?」

「……かも」

大変なことになった、と思った。

相手の表情が読み取れなければ、シャッターなんて切れない。ドロシーも、みなが雲や空の表情を読めないのは知識としては知っている。だから、何が大変な事態なのか判らないだろうけど――自分は困る。

「妙なことに付き合わせちまったからなぁ」

「あ、いえ、そんなことは……あるかもですけど」

「あるのかよ!」

「あ、いえ。その、ついうっかり本音がその」

ぷすっと膨れた表情になったナイアルが酒の残りをあおった。だが、次の瞬間、彼の表情が何かとっておきのイタズラを思いついた子どものような顔になる。

「そうだなあ。お互いこのままじゃ済ませられねぇよなあ」

「はい?」

ナイアルが空になった杯でテーブルを叩く。

「よし! 決めた。このまま引っ込んでられっか! これは報道の自由に対する侵害だ! 市

長だからって許されることじゃねえ! 行くぞ、ドロシー!」

「え、ええ!? ど、どこに?」

「市長の家だよ! 乗り込んで、おまえのカメラを取り返す!」

「こ、これからですかあ」

もう外は真っ暗だ。夜も遅いのに。

「おい! カメラが惜しくねえのか? マイカメラがよ!」

「そりゃ……。取り返したいですよぉ。わたしのポチ君!」

「……名前つけてんのかよ」

スランプだからって愛するカメラを手放したいわけがない。

あれは――ドロシーのもうひとつの目なのだ。

自分の身体の一部だ。

「だったら――」

行くぜ! とナイアルとドロシーは乗った。

こうして、ナイアルとドロシーと、そしてボース市にとって、長い長い夜が始まった。

7

ドロシーとナイアルは居酒屋『キルシェ』を出た。
目指す市長邸は、通りを南に下った先。
あたりはだいぶ薄暗くなっていたけれど、石畳の通りにはまだ人の流れがあった。
角に立つ街灯には、もう明かりが灯っている。のっぽが万歳をしているような格好の細長い灯りの柱が、頭と両手の先に備えたガラスの球体から、まぶしい導力灯の光を周囲に撒き散らしていた。
「でも、返してもらう。意地でもだ。このまま引き下がってられっか！」
「返してくれるんでしょーか」
不安を吹き飛ばそうとするかのように、前を歩くナイアルが語気を強める。
いや、実際、吹き飛ばそうとしてくれているのだろう。
ドロシーは知っている。
口は悪いし、目つきも悪いし、すぐに自分をポンコツ扱いするけれど、ナイアル・バーンズという男は、こう見えて色々と気配りをしてしまう性分の持ち主なのだ。
優しい、とも言う。
本人の前では決して言おうとは思わないが。

——だって、絶対全力で否定しますもんねぇ。しかも、数日はへそを曲げて怒ったふりをするに決まっています。
そんなことを考えているうちに、ドロシーたちは市長邸の前まで来ていた。
左右に立つ厳つい門柱に挟まれた鉄柵の門は、案の定というか当然というべきか、夕方をとっくに過ぎたこの時間ではしっかりと閉ざされていた。
たぶん、鍵も閉まってる。
呼び鈴を鳴らせば誰か出てきてはくれるだろうが、果たして門を通してくれるだろうか。
ここまで来て、ドロシーはようやく頭が冷めてきた。
ちょっと無理っぽい、ような。
「せ、先輩……やっぱり無謀ですよぅ」
「何びびってんだよ！　おら、行くぞ！」
そうドロシーに言ってから、ナイアルは力任せに呼び鈴を叩き、あろうことか大声でこう言った。
「たのもぉおおお！」
「センパイ、それじゃ、道場破りですぅ！」
慌ててナイアルの服の裾を引っ張ったが、時すでに遅し。ぉぉぉ、と、ナイアルの言葉は木霊となってあたり一帯に響いてからゆっくりと消えてゆき——。

広い通りの向こう、就寝していたらしき真っ暗な家々に明かりがぽつぽつと灯った。
これはまずい。と、ドロシーは思った。
明かりの灯った家の窓が引き上げられる。「うるせえぞ、バカヤロー」高級住宅街にはあまりふさわしくない怒声が聞こえてくる。
――も、もも、もうしわけないですぅ！
暢気者のドロシーでも、さすがに肝が冷えた。
あんまりナイアル先輩に呑ませちゃだめだ。
心に固く誓う。次に呑み過ぎそうになったら、絶対止めよう。本気で止めよう。じゃないと身がもたない。
「やれやれ……困った記者さんですね」
呆れたような声に慌てて顔を向ける。
――い、いつの間に！
メイドがひとり、鉄柵の向こうに立ってナイアルと睨みあっていた。
鼓動、三つか四つぶんほどだけ。
しん……と、あたりに夜の静けさが戻った。
その静寂を破って、がらがらと門を引き開ける音が鳴る。ナイアル先輩とメイドを隔てていた柵がなくなった。けど、ふたりは相変わらず睨み合ったままだった。

――この人は、確か、リラさん。
朝、ナイアル先輩を毛虫のごとく追い払ったメイドさんだ。
「このような夜更けに、人目もはばからず遠慮もせずいったい何の御用でしょうか、記者ナイアル・バーンズ殿」
「返してもらいにきた」
「はて？ あなたに何かを借りた覚えはないのですが」
「あんたに言ってるんじゃねぇよ！」
「えっ、でもカメラを持ってったのはこの人ですよ、先輩」
と、思わずドロシーは言ってしまったのだけど、余計に事態をややこしくしただけだったようだ。
「ただのメイドがオーバルカメラを欲しがるかよ！」
律儀にナイアル先輩が突っ込み、リラさんがさらにそれを受ける。
「それは全メイドに対する侮辱です、ナイアル殿。我々はお仕えする主人のために常に世の中の新しいものに対して目を配っているものなのです。あの最新式のオーバルカメラは充分に興味を引く対象かと」
「メイドさんってすごいんですね！」
感心したら怒られた。

「おまいは何を言ってるんだ。ちげぇ！　そういう意味じゃねえっての！　指図したのは市長のほうに決まってるだろ！　てか、やっぱ判ってんじゃねえかよ！」
「当然です」
　しれっとリラさんが言った。
「からかっていただけですから」
　にこりともせずに言われて、先輩が絶句する。指先でリラさんを指したまま、口をぱくぱくと開けたり閉じたり。
　声も出ない。
　——ふわわ。なんか、やっぱりすっごい人ですよ、この人！
　リラさんはくるりと背中を向けると、すたすたと屋敷に向かって歩きだした。
「お、おい、待てよ！　こら！」
　すたすた。
「て、てめ——」
「よろしいのですか？」
　と、顔だけをこちらに向けてリラさんが涼やかな声で問いかけてくる。
　そのひとことで、先輩は声を荒げようとしていた幾先を制されてしまう。
「——え、な、なに、を」

「カメラを返して欲しいのでしょう？」
　言いながら、屋敷の入り口へと続く短い階段に足をかける。まるで彼女のことを見張っていたかのように、すっと、音もなく内から扉が開いた。
　導力灯の明かりが庭へと漏れ出てくる。
　まぶしい光の内へと歩きながら、ボース市長付きメイドのリラは、背中越しに言い放ったのだった。
「先ほどからメイベルお嬢様がお待ちです。どうぞこちらへ」
　かすかにこちらに向けた彼女の口許に、小さな笑みが浮かんでいた。

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

**アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！**



3名様

「も～っと集まれ！ファルコム学園」缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.150プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）

2：面白かった記事の番号→
つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）

3：アンケート①漫画「空の軌跡SC」完結を受けての感想
アンケート②漫画「空の軌跡」シリーズでもっとも印象的なエピソードは？

4：希望するプレゼント番号

5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
2：イースX -NORDICS（ノーディクス）- 最新情報
3：ファルコムニュース
4：暁の軌跡最新情報
5：英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット

応募締め切り　8月28日（月）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊FALCOM MAGAZINE Vol.150

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/